四天王に転生したら部下の双子に
想像以上に執着されてるんだけど

CHARACTERS

リリア

ブラッドリーの娘で、
皇帝の婚約者。

ブラッドリー

皇国の太政大臣。
『ひよレジ』のラスボス。

ヴィクター

シキの部下＆護衛騎士で、
ゼノンの双子の兄。
執着心が強く
加虐的なところがあるが、
面倒見がいい面もある。

ゼノン

シキの部下＆護衛騎士で、
ヴィクターの双子の弟。
ヴィクターと同じく
執着心が強く
加虐的なところがあるが、
気遣いができる面もある。

ローズ

皇国四天王の一人。
『パルファン・ドゥ・ローズ』という
神造兵器の使い手。

ハルト

漫画『ひよレジ』の主人公。
片田舎で家族とともに食堂をやっていたが、
訳あって今は革命軍に身を投じている。
神造兵器『聖剣バルムンク』の使い手。

シキ（前世・敷島志紀）

漫画『比翼のレジスタンス
～片田舎の料理人が革命軍で成り上がる～』
――通称『ひよレジ』に出てくる悪役・皇国四天王のシキに
転生してしまった元男子大学生。
神造兵器『キャンディケイン』の使い手で、
超絶万能薬である神薬を作ることができる。

1

「――キ様、シキ様！　大丈夫ですか？」
「うっ……？」
目を覚ました瞬間、なんかやけに整った顔立ちの男が顔を覗き込んできた。
しかも、その男、カラーリングがやたらと派手だ。銀髪をオールバックにしており、瞳は赤と緑のオッドアイで、細いフレームの眼鏡（めがね）をかけている。眼鏡（めがね）の向こうの瞳はやや鋭すぎるものの、それを差し引いても端整な顔立ちの男だ。
驚いたことに、おれはそんなイケメンに背中を支えられ、抱き起こされていた。
慌てて立ち上がるが、なんだか妙に頭が痛い。あと、いつもよりも視点が高いような気がする。
あれ、おれってこんなに身長が高かったっけ……？
「大丈夫ですか、シキ様。シキ様は先ほど、ウルガ族に襲われてしばらく気を失っていたんですよ。覚えてますか？」
「ウルガ族……」
ずきずきと痛む頭を掌（てのひら）でさすりながら、おれはイケメンの言葉を繰り返した。

シキ、ウルガ族――確かにその単語には、覚えがある。覚えはあるが、靄がかかったように判然としない。

ぼんやりとしたまま周囲を見渡す。今おれたちがいる場所は、木造の洋風家屋が並ぶ町中だった。なかなか都会的でお洒落な町並みだが、恐ろしいことにあちこちから人の悲鳴が聞こえる。遠くには火の手が上がっているのが見えるし、なんなら周囲には人間の死体と思しきものまで転がっている。

な、なんだコレ？　どういう状況だ？

怯えながら周囲を見回していると、ふと、地面に倒れている人間のうち、一番近くにいた男がこちらを睨みつけているのに気がついた。真っ赤に充血した目には殺意が満ちている。そして、その両足は膝から下が切断されており、真っ赤な血がどくどくと地面へ流れていた。

男はおれと視線が合うと、憎々しげに吐き捨てた。

「四天王シキ！　女子供にまで手をかけるとは……貴様に人の心はないのか……！」

そして、男は口から血の塊を吐き出して、がくりと力を失った。かっと見開かれたままの目からは、光が失われている。どうやら……絶命したようだ。

傍らのイケメンは男をちらりと見て、蔑むような笑みを浮かべた。

「弱い犬ほどよく吠えるものですねぇ……ご安心ください、シキ様。襲撃者は全員殺しました」

「しゅ、襲撃者……？」

「ああ、シキ様のキャンディケインで血を採っておきますか？」

イケメンに手を引かれて、今しがた死亡したばかりの男の前に連れてこられる。

え？　なに、どういうこと？

この状況で、おれに一体なにをしろと？

困惑してイケメンを見つめると、彼は慣れた手つきでおれの左手首を取った。そして、手の中に一本の杖――王笏みたいなものを握らせる。

これが、さっき彼が言っていたキャンディケインとやらなのか？

だが、なんというか……可愛らしい名前とは裏腹に、王笏の上部は大きな鷲の頭と、ごてごてした宝石で彩られている。

わけもわからず、ひとまず導かれるまま、杖を握った指先に力を込める。すると、杖の先端が勢いよく伸びて、地面に倒れる男の背中に突き刺さった。

次の瞬間、男の身体はどんどん水気を失い、あっという間にカッピカピのミイラのような姿になった。この間、約十秒にも満たない。おれは呆気に取られ、杖を抜こうという思考にすらならなかった。

お、おいおいおい!?

イケメンさん、こんなことになるなんて聞いてないけど!?

おれの驚愕をよそに、ミイラと化した男の身体はぼろぼろと崩れていく。同時に、杖が元の長さへすると縮み始めた。そして、杖の上部にある鷲の嘴が開くと、そこからコロリと小さな飴玉のようなものが出てきたのだ。反射的に掌で受け取って、その球体をしげしげと眺める。

うっすらと透き通った赤色のそれは、ほのかに甘い香りを放っていた。大きさといい、見た目といい、本当にただの飴玉に見える。なんかちょっと美味しそうだ。ただ、こうして手で触れていても飴玉のようにベタついたりはしない。

でも、この飴玉って、さっきの男性の血液的なものを吸い上げてできた代物だよな……？

この杖はいったいなんなんだ……？

「ああ、ちょうど彼で十人目でしたか。ようやく神薬が一つ完成しましたね」

「……神薬？」

おれが小首を傾げると、傍らのイケメンが訝しげな顔をした。

「シキ様、本当に大丈夫ですか？　今日はもう休まれたほうがいいのでは……」

いや、休みたいのはやまやまだけど、それよりもさっさと逃げたほうがいいのでは？

見たところ、この町は、現在進行形で何者かに襲われている最中のようだ。

見渡す限り家屋は半壊状態で、こうしている間にも、遠くから人の悲鳴が聞こえてくるし……それに、今のミイラ状態になった男性を含めて、そこかしこに死体らしきものが転がっている。

このイケメンは、どうしてこの状況で焦らずにいられるんだろう？

……だんだんと、胸の奥から言いようのない焦燥感が込み上げてくる。自分がなにか、致命的な勘違いをしているような感覚だ。

おれはもう一度、傍らのイケメンをじっと見つめた。

……よく考えると、そもそもこいつは日本人じゃないよな？

髪の色は銀だし、瞳は赤と緑のオッドアイで、顔立ちも日本人離れした整い方だし、そもそも着ている服だって黒を基調とした軍服だし……

いや、待てよ？　こいつの顔、どこかで見た覚えがあるような……

それに、さっきのキャンディケインっていう名前の杖にも聞き覚えが……あっ!?

「シキ様？　どうかされましたか？」

「っ、悪いが……手鏡のようなものはあるか？」

「ええ、ありますが……どうぞお使いください」

イケメンから差し出された手鏡を受け取り、おそるおそる覗き込む。

そこに映っていたおれの顔は、おれ自身の顔ではなかった。だが、おれはこの顔をよく知っていた。

うなじにかかるくらいの長さの黒髪に、切れ長の金色の瞳。目の前の男性と同じ、黒を基調とした軍服と軍帽。そしてなにより、キャンディケインという名前の鷲の頭の王笏……！

ま、間違いない！

この顔は――おれが読んでいた漫画『比翼のレジスタンス　～片田舎の料理人が革命軍で成り上がる～』に出てくる、皇国四天王のシキだ！

どうしてこんなことになってるんだ？

ま、まずは、状況を整理しよう。

おれの名前は敷島志紀。就職活動真っ最中の大学四年生だ。

最後に覚えているのは、大学に向かおうと横断歩道を渡っていた最中に、猛スピードで左折してきた車に撥ねられたことだ。
次に目が覚めた時には……なぜかおれは『比翼のレジスタンス　～片田舎の料理人が革命軍で成り上がる～』、通称『ひよレジ』という漫画に出てくる悪役キャラクター、皇国四天王のシキ・フォン・フォートリエになっていた。
もしかすると、これは転生というやつなのか……？
試しに手の甲をつねってみると、確かな痛みを感じた。
どうやらこれは夢ではないようだ。
「シキ様、どうかしましたか？」
傍らにいた男に声をかけられ、はっとして顔を上げる。銀髪オッドアイの男は訝しげな顔で、おれを見下ろしていた。
「い、いや、なんでもない。ちょっと頭が痛かっただけだ」
おれは漫画のシキの口調を必死に思い出しながら、彼に手鏡を返した。
確かシキは、こんな感じのえらそうな口調だったはずだ。
それと、このイケメンもシキと同じく『ひよレジ』の敵キャラだったよな。
ええっと……あれ、名前なんだっけ？
この『ひよレジ』って、五年前に連載が完結した漫画なんだよな……最近読み直してなかったから、ストーリーやキャラクターの記憶がところどころ曖昧だぞ。

連載当時はかなりはまってたし、アニメ化した時にはバイト代をつぎ込んでブルーレイだって購入したけれど……この漫画、おれの一番大好きな推しヒロインが最終巻で死んじゃうんだよな～！
しかも最後まで、想いを寄せていた主人公に気持ちを告げることもできないまま、敵に殺されてしまうんだ……その展開が切なすぎて、辛すぎて、コミックスもブルーレイも棚にしまい込んでしまった……
で、でも、ちゃんと覚えていることもあるぞ！
この『ひよレジ』は、皇国の片田舎で家族と一緒に食堂をやっていたハルトという青年が主人公だ。平民である主人公ハルトが、とある事件をきっかけに革命軍に所属し皇国に革命を起こす、というのが基本のストーリーである。
シキは、皇国軍の中でも地位の高い四大将軍の一人だった。つまり、主人公と敵対してる悪役サイドのキャラクターである。
二つ名は『神薬の担い手』。作中では、四大将軍という正式名称よりも四天王という通称で呼ばれることが多かった。
そして、目の前にいるのは、シキの直属の部下だ。
えーっと、名前なんだっけ？　確か兄弟がいたはずなんだけど……
「おーい、シキ様！　ヴィクター兄貴！　そっちは終わったかよ？」
あっ！　そうだ、この銀髪眼鏡の男の名前は、ヴィクターだ！
救いの声がした方向を見ると、なんと、ヴィクターとまったく同じ顔をした男が、小走りでこち

らへやってくるのが見えた。
彼はヴィクターと同じ赤と緑のオッドアイではあるが、銀髪を短髪にしており、軍服もかなり着崩している。身体つきも彼のほうががっちりとしていて、筋肉質だ。
「ええ。襲撃者に襲われてシキ様が少しの間、気を失いましたが、今は問題ありません。神薬も一つ完成しました。ゼノン、戦況はどうでしたか？」
「問題なかったぜ、皇国軍の大勝利だ。今はローズ様が、この町から逃げ出そうとしているウルガ族の生き残りがいないかを確認しているぐらいだぜ」
新たにあらわれた彼の名前は、ゼノンというらしい。
そうだ、だんだん思い出してきたぞ！
確かこの二人は双子だったな。
眼鏡（めがね）をかけていてオールバックにしているほうが兄のヴィクターで、今あらわれた短髪のほうが弟のゼノンだ。二人とも、四天王シキの直属の部下であり、護衛騎士でもある。
一つ思い出すと、芋づる式に、だんだんと他のことも思い出してきた。
まず『ひよレジ』は全二十巻の漫画だ。そして、四天王シキと双子の部下は、一巻で登場するキャラクターだが、この時点では主人公のハルトと三人はまだ会っていない。
一巻では、皇国の南部に住むウルガ族が革命軍に資金供与をおこなっていたことがわかり、皇国軍が制圧作戦に乗り出したのだ。
そのウルガ族の制圧作戦に派遣されていたのが、四天王シキだ。先ほどの双子の言葉から察するに、ちょうど今まさしく、ウルガ族の町の制圧が完了したところなのだろう。
しかし、制圧とは名ばかりで、この地でおこなわれたのは容赦（ようしゃ）ない虐殺だった。
この地に住まうウルガ族は、女子供を含むほとんどの者が殺された。革命軍に協力するとどうなるかを皇国全土に知らしめるためだ。
ただ、ウルガ族が殺されたのは、見せしめだけのためではない。
その理由の一つが、このシキの持つキャンディケインという杖だ。
この杖は、『ひよレジ』に出てくる『神造兵器』というすごい能力を持った武器の一つだった。
先ほどのようにして、人間十人分の血液を吸わせることで、神薬という回復薬を生み出せる。この神薬は、人間の怪我やほとんどの病気を治すことができる超絶万能薬だ。さほど時間が経っていなければ、切断された手足だってくっつくほどのすごい薬なのだ。
ウルガ族が皆殺しにされたのは、この神薬を作るためでもあった。
そう。つまり、おれがシキになったということは――
「では、私たちは神薬を生成しに行きましょうか。シキ様、行けますか？」
「死んでから時間が経った死体だと、血を採ってもダメなんだろ？　なら、早く行こうぜ」
「あ、ああ……」
これからおれは、ウルガ族の人たちの死体から血を採らねばならないということである。
つまり、先ほどのようなミイラ化現象を、あと何十人とやらねばならないわけだ。
これが悪い夢なら今すぐ覚めてほしい。気を失いたい気持ちでいっぱいだが、そうも言っていら

れず、おれはヴィクターとゼノンに促されるがままに血の採取へ向かった。
――結果から言えば、おれは無事に仕事をやり終えた。精神的には無事ではなかったが。
「転生するなら、せめて主人公サイドの人間がよかった……！」
あれから二時間後。おれはあてがわれた天幕の中で一人、椅子に座って机につっぷしながらうめき声を上げていた。
おれはあのあと、皇国軍と戦って亡くなったウルガ族の人たちの遺体のもとへ向かった。皇国軍は、おれが血を採りやすいようにわざわざ町の大通りに死体を並べてくれていたので、作業自体はさほど難しいものではなかった。
ここでやりたくないなんて言ったら、周囲に疑念を持たれる。なにせ数時間まで、おれは自らの意思でこの任務についていたのだ。そのため、歯を食いしばってキャンディケインで死体から血を吸い上げていったが……本当に、体力的にも精神的にもしんどかった……
この神造兵器にキャンディケインなんて名前をつけた奴のセンス、マジでどうかしてる！
この杖、見た目的にも能力的にもそんな可愛らしい代物じゃないだろ！
とはいえ……不思議なことに、おれは大量の死体を前にしても、嫌悪や、罪の意識というものをほとんど感じなかった。
前世の〝敷島志紀〟だったら、あんな光景はとても耐えられなかっただろう。
やっぱり、おれは敷島志紀であると同時に、シキでもあるらしい。
ヴィクターにそれとなく聞いたところによると、おれはウルガ族の男に頭を殴られ、一時、気を

失っていたそうだ。
これはおれの推察だが――頭を殴られた衝撃によって、おれは前世の敷島志紀としての記憶を取り戻したんじゃないか？　そして、その衝撃と、前世の二十二年分の記憶が一気に頭の中に流れ込んできたことによって、シキとして生きてきた記憶を失ってしまったのではなかろうか。
なぜこう考えたかというと、敷島志紀の思い出は細部まで思い出せるのに、シキの記憶がこれっぽっちも思い出せないからだ。
頭を強く打ったことで記憶喪失になってしまった、という話は前世でも聞いたことがある。今のおれはそれに近い状態なのだろう。
しかし、それがわかってもどうしたものか。周囲の人間に、頭を打ったことで記憶喪失になったようだと説明したほうがいいのだろうか？
「えっと……ひとまず、今の状況を改めて整理してみるか」
まず、このシキという男は、『ひよレジ』に出てくる皇国四天王の一人である。
シキはフォートリエ侯爵家の当主であり、彼の持つキャンディケインは侯爵家に代々受け継がれてきたものだ。年齢は二十一歳で、十年前に両親を馬車の事故で亡くし、フォートリエ侯爵家を継いだ。
そんなシキは「貴族こそが人間であり、平民は家畜である」という考えを持つ、傲慢で冷酷な人物だった。
一巻の初登場時、彼がウルガ族の死体から血を抜き取る場面では「家畜が思いあがるからこう

なるのだ。身の程を弁えろ、豚が」と吐き捨てて、無表情で彼らをカラカラのミイラにしていった。原作の細部は覚えていないおれでも、あそこはシキがあまりに無慈悲すぎて印象に残っている。

なお、おれはもちろんそんな恐ろしい台詞を言う度胸はなく、なにも言わずに黙々とミイラ化作業をおこなった。原作改変、ほんとすみません。

「はぁ……ほんっと、なんでシキなんだよ……」

そりゃあ、イケメン度合いに不満はない。顔も無表情クール系でカッコいいし、背も高いし……でもそんなイケメン度合いを差し引いても、性格と立場が最悪すぎる！

それに加えて、シキって最終的にめちゃくちゃひどいことになるし！

シキの持っているキャンディケインは、人間の血を吸わせることで神薬を生成できる杖だ。吸わせる血は、生き血でもいいし、死体の血でもかまわないが、死体の場合はあまりに損傷がひどかったり、死亡してから時間が経過しすぎたりしていると採取できない。

キャンディケインはフォートリエ侯爵家に代々受け継がれてきたもので、フォートリエ以外の血筋の人間には使用できないと言われている。

しかもフォートリエ侯爵家の人間なら誰でも扱えるわけではなく、シキは三代ぶりにあらわれた、キャンディケインを扱うことのできる適性者だった。

そのため、漫画の最終巻――革命成功後も、シキだけは革命軍に処刑されることはなかった。

万能薬である神薬の生成をさせ続けるためだ。

しかし、処刑されなかっただけで、無事だったわけではない。

革命軍に捕縛されたシキは、酸で喉を焼かれ、両目を潰された。加えて、両足と左手を切り落とされた。その後、キャンディケインを使うために必要な最低限の部位を残された姿で、革命軍の占領した皇城の地下牢に閉じ込められたのだった。

……うん。そりゃあ漫画でのシキは極悪非道だったし、無辜の民を大勢殺したよ。

彼にはそうされるだけの理由があったと思う。

おれだって読んでた当時は「うわぁ……ちょっとえぐすぎるけれど、でも、こいつがやったことを思えばしょうがないか～」って思ってたし。

でも、それってつまり、このまま行くとおれが今後同じ目にあうってことだよな⁉

絶対に嫌なんだけど⁉

いや、そりゃおれだって今ウルガ族のみなさんをカッピカピのミイラにしたけれどさ！　でもあの状況でおれが「やりたくない」なんて言ったら、周りにいた双子や皇国軍の人たちに疑われかねないしさ⁉

「はぁ……」

おれは天幕の中で大きなため息をついた。

しばらく一人になりたかったので、双子には用事を言いつけて遠ざけてある。

「……いったい、どうすればいいんだ……」

重い、あまりにも重すぎる。

人の命、自分の置かれた状況、これからの展開。

なにもかもが重すぎる。
せめて転生するなら、シキが子供のころとかだったらよかったのに……！
それなら原作が始まる前に、どうにかして革命軍に渡りをつけて、皇国軍から革命軍に寝返ることができたかもしれない。
でも、それももう遅い。すでに革命軍にシキの悪名は轟いていることだろう。今さら革命軍に寝返ることなどできない。
おれは立ち上がると、天幕の外へ出た。双子はまだ戻ってきていないようだ。
外では皇国軍の兵士たちが見回りと、戦闘の残骸の片付けをしていた。
彼らはおれに気づくと、ぴしっと敬礼をしてくれる。そしてそこにいた兵士のうち、一番年かさの兵士がおずおずとこちらに声をかけてきた。
「閣下、どちらへ？」
「少し歩いてくる」
「であれば、護衛を……」
「不要だ、このあたりはもう掃討が済んだのだろう？　すぐに戻る」
「……承知いたしました。なにかあればすぐに声をかけてください」
漫画でのシキの口調を思い出しながら、できる限りそれっぽく返答する。問題はなかったようで、兵士のおじさんは訝しむ様子もなく、重々しく頷いて敬礼をしてくれた。
そうして天幕から離れて歩き続けると、町の広場らしき場所に出た。

いつもは市場が出て賑わっているであろうそこは、今や死体が積みあがっていた。石畳には、真っ赤な血潮によって水たまりができている。
大通りに並べられなかった遺体は、損傷があまりにもひどいため、キャンディケインによる血の採取は難しいだろうと聞いていた。それが、これか――
「……」
凄惨な光景だった。
男も女も、子供も老人も、みんな殺されている。その死体は無造作に広場の中央に積み上げられていた。光を失ってどろりと濁った眼球がすべてこちらを向いているような錯覚に陥る。
あたり一帯にはむせ返るほどの血の匂いが立ち込めており、その息苦しさに咳き込みかける。
だが、おれが咳をする前に、何者かの小さな咳が耳に届いた。
反射的に音のした方向に顔を向ける。
「――誰だ。出てこい」
言ったあとで、もしも強そうな人が出てきたら困るな……ということに気がついた。
い、言わなければよかった！
ひとまず、慌てて腰に差していたキャンディケインを抜いて構える。
そうして待機することしばらく、死体の陰から、二人の人間がゆっくりと這い出てきた。
見れば、二人ともまだ年若い少女たちだった。どうやら今まで死体のふりをして、皇国軍をやり過ごしていたらしい。一人は十代後半、もう一人は十歳になるかならないかという年頃か。

「……ウルガ族の生き残りか」
顔立ちが似ているから、きっと姉妹なのだろう。二人とも泥と血に汚れ、服は擦り切れて、傷だらけの姿だった。
……どうして両親がともにいないのかは、考えたくないな。
二人のうち、姉と思しき少女は涙目になりながら、震える声で懇願してきた。
「お、お願いです……私たちは戦士ではありません。見逃してください」
「わかった。さっさと行け」
おれが二つ返事で頷くと、少女が驚いたように目を見開いた。
「えっ？　ほ、本当に見逃していただけるんですか？」
「……わかったと言っただろう、さっさと行け」
顎をしゃくって、皇国軍駐屯地とは反対の方向を示すが、少女はしばし呆然としていた。
だが、我に返るとさっと立ち上がって、妹の手を引いて町の外を目指して駆け出した。
二人の背中が完全に見えなくなるまで、おれは、じっとそこに立っていた。
……もちろん、こんなことで罪滅ぼしができたとは思っていない。
これはただの自己満足だ。おれがそうしたいと思ったから、そうしただけだ。
でも――
「……戻るか」
どうして自分がシキになってしまったのか、これから自分がどうなるのか、ちっともわからない。

『ひよレジ』の中では、ウルガ族は皇国軍に皆殺しにされ、生き残りは一人もいなかったと語られていた。
けれど、シキに転生したおれは、少女たちを見逃すという選択をした。
ちっぽけな変化かもしれないけれど……それでもこれは、原作の展開をわずかに変えることができたってことじゃないか？
ならば……シキに転生したおれにこそ、なにかできることがあるのかもしれない。
もしそうなら、おれは――
「――あーっ、シキちゃん、ようやく戻ってきた！　もう、どこ行ってたの？　ローズ、一人でお留守番してるの、すっごく寂しかったんだけど！」
天幕に戻ると、そこには先ほどはいなかった人物が二名いた。
そのうちの一人はよく知っている。彼女もまた、シキとともにウルガ族の制圧作戦のためにこの地に派遣された皇国四天王の一人だ。
というか、むしろ制圧作戦の指揮は彼女がとっていた。シキは神薬生成のために、後方で血を採取していただけだ。
彼女は四天王唯一の女の子で、名前をローズという。ピンクの髪をツインテールにしており、黒いゴスロリドレスを着て、テディベアの形をしたポシェットを斜めがけにしているのが特徴だ。
「……少し外を見てきたんだ。それよりもローズ。お前のそばにいる少女は……」
「ああ、この子？」

おれが視線をやると、ローズは傍らにいた女の子を蹴り飛ばした。
女の子は力なく床に倒れる。生きてはいるようだが、その瞳はすっかり光をなくして地面を映すばかりだ。
彼女は――おれが先ほど、町の広場で出会った女の子だった。妹のほうだ。
周りを見ても姉はどこにもいない。
ただ……代わりに、妹の顔や服には、先ほどまではなかった血の汚れがべったりとついていた。
ローズは地面に倒れ伏した少女の背中をヒールで踏みつけ、得意げに胸を張った。
「広場の死体を焼却処分しようかと思って行ったら、この子を見つけたの！　この子、平民にしてはなかなか可愛い顔してるでしょ？　ウルガ族の殲滅記念に、この子を持ち帰って剥製にして部屋に飾ろうと思って！」
「……っ！」
「実はさっきまでもう一人、女の子がいたんだけど……鼻の高さがイマイチだったから、つい殺しちゃったんだよねぇ。その時、この子ったら『おねぇちゃん、おねぇちゃん』って泣きわめいてうるさくてさぁ！」
えへへ、と可愛らしくはにかむローズ。
……そうだ、思い出した。このローズという少女は、シキと同じく四天王の一人だが、いわゆる『可愛いもの好き』なのだ。
彼女の『可愛いもの好き』は服やアクセサリー、ぬいぐるみにとどまらず、『人間』すら対象と

なる。ローズは気に入った少女を捕らえて、皇城の専用の工房で職人たちに剥製にしてもらい、その剥製を着せ替え人形にして遊ぶのが好きなのだ。
「ところでシキちゃん。さっき殺した女が、変なことを言ってたんだけどさぁ……」
「変なこと？」
心臓の鼓動がばくばくと速くなる。
「なんか『自分たちはシキ将軍に見逃してもらった』って言ってたんだよねぇ。それってホント？」
「……」
ローズの値踏みするような視線に、全身から汗が噴き出そうになる。声が裏返りそうになるのを必死に我慢して、平静を装ってローズを見つめ返した。
「ああ、そうだな。その女の言うとおり、広場で出会ったが見逃した」
「……なんでそんなコトしたの？　反逆者に慈悲をかけるなんて、らしくないよ」
訝しげなローズに、おれは肩をすくめて答えた。
「自分で手を下すのが面倒だっただけだ。この町は皇国軍がすでに包囲しているんだ、どうせ逃げられやしない」
おれの返答に、どこか不安そうだったローズは一転して笑顔を見せた。
「なーんだ、そういうこと！　よかった、シキちゃんが敵を見逃すなんてらしくないから、どうしたのかと思っちゃったよ！」
「ふん、それこそ面白い冗談だな」

「えへへ、変なこと聞いちゃってごめんね」
ローズはにこにこしながら、自身の懐から香水瓶を取り出した。彼女の持つ『パルファン・ドゥ・ローズ』というペンダント型の香水瓶だ。その香水を少女に噴きかける。
「さあ、立って！　安心して、あなたはこれからとびっきり可愛くなれるのよ」
「う、あ……」
少女は意思を失った瞳とは裏腹に、しゃっきりとした動作で立ち上がった。まるで操り人形のような動きだ。
それもそのはず、あの香水は、シキの持つキャンディケインと同じ神造兵器の一つだ。
あの香水を嗅がされたり、噴きかけられたりすると、身体の自由が利かなくなり、ローズの指示どおりにしか動けなくなる。
「じゃあね、シキちゃん！　あたしは早く剥製作りをしたいから、一足先に皇都へ戻るね～。また向こうで会おうね！」
「……ああ」
楽しそうにローズは少女を連れて天幕を出ていった。あとにはおれ一人が残される。
おれはふらふらと力なく椅子に座ると、両手で顔を覆った。泣きたい気分だったが、不思議なことに涙は一滴も出なかった。
……きっと、おれに泣く資格なんてないからだろう。
だって、あの少女がこれからどんな目にあうのか、おれは知っている。

知っているのに、助けることができない。その力もなければ、勇気もないからだ。
……シキになったせいか、死体から血を採取した時に、嫌悪感や罪悪感はあまり抱かなかった。でも今は、途方もない無力感を味わっている。
ああ――痛いぐらいに、わかった。
助けられたと思った命は、呆気なく零れ落ちた。おれのやったことはなにもかも無意味で、おれは想像以上に無力な存在だった。
こんな世界で、おれができることはただ一つ――
「もう、原作を変えようなんて二度と思いあがらない……！　おれの目的はただ一つ……穏便に国外脱出してみせる！」

2

ウルガ族制圧の任務を無事に終えて、おれは部下たちとともに皇都へ戻ってきた。
そんなおれを出迎えたのは、この皇国の十五代目である皇帝と、その補佐官であるブラッドリー大臣であった。
「シキ・フォン・フォートリエ、ただいま帰還いたしました」
「うむ。シキ将軍、この度の遠征、大義であった」
つまりは『ひよレジ』のラスボスである。
とはいえ、皇帝は違う。なにせ、彼はまだ十八歳の青年だ。
くせの強い髪を持つ、そばかす顔の若者で、おどおどしながら大きな玉座に座り、身体を縮こませている姿は、見ていて可哀想になるほどだ。
皇帝は隣に立つ大臣をちらちらと窺い、ちいさな声でこそこそと尋ねた。
「ブ、ブラッドリー。次はなにを言えばいいのだ？」
「労いの言葉はもう充分です。あとはこの度の戦の報奨金のことを」
「ど、どれくらいなら充分なのか？」
「まあ、一億ナールもあれば大丈夫ですよ」

「そ、そうか！　よし、わかったぞ」
なお、これらの会話はしっかりおれの耳に届いている。
なにせこの玉座の間、大理石でできているからよく響くんだよね……
皇帝はこほんと咳ばらいをすると、やや震える声音で高らかに告げた。
「今回のウルガ族の制圧、見事であった！　褒美として一億ナールを授けよう」
「感謝いたします、陛下」
おれがそう答えると、皇帝はほっとした表情を浮かべた。そして、再び不安そうに大臣を見上げる。
大臣はうむうむと頷くと、皇帝に気づかれないようおれに目くばせをしてきた。その後、大臣は堂に入った態度で告げる。
「下がってよいぞ、シキ将軍。貴公も遠征で疲れているだろう、しばらくは養生するがよい」
「ハッ、お気遣い感謝いたします」
おれはうやうやしく礼を言ってから、玉座の間を出た。五分にも満たない謁見だった。
玉座の間の外では、双子のヴィクターとゼノンが待機していた。彼らを背後に従えて、おれは玉座の間から一番近い部屋へと向かう。
その部屋は応接間だった。おれたち三人が部屋に入ったあと、十五分ほど時間をおいてから、新たな人物が部屋に入ってきた。先ほど、玉座の間にいたブラッドリー大臣である。
大臣は、筋肉質な身体つきの壮年の男性だ。人当たりのよさそうな笑顔とは裏腹に、その瞳は、

ここにいる誰よりも欲望に濁(にご)っている。
「さてさて、シキ将軍。今回、神薬はどれほど生成できましたかな？」
「さっそくか？　随分と性急だな」
「すみませんねぇ。ですがこちらも、帝国や王国の王侯貴族たちから今か今かとせっつかれているのですよ」
おれは肩をすくめると、懐(ふところ)に入れていた神薬の包みを取り出し、大臣に手渡した。
「今回生成できた神薬は、全部で十二個だ。そのうちの三つはおれが貰(もら)ったぞ」
「おお！　ずいぶん生成できましたね」
大臣は包みを開けて中身を確認すると、にんまりと笑みを浮かべた。
「お疲れさまでした……と言いたいところですが、三つは取りすぎでは？」
「おれが作ったものだぞ、取り分としては少ないくらいだ」
ふん、と鼻で笑って強気な口調で告げる。
心臓がかなりドキドキしているが、ここらへんのやり取りは漫画で出てきた流れとほぼ同じだ。余計なことを言わなければ大丈夫だろう。
ちなみに、実際に生成できた神薬の数は十四個であり、おれは五つの神薬を自分用に確保している。
大臣に数を誤魔化(ごまか)して伝えたのは、今後のためだ。
それを気取られないように、おれは不満げな表情を作って大臣を睨(にら)んだ。

「そもそも神薬を作るだけならウルガ族を皇都に連行してくればいいだろう。このおれを、あのような豚どもの住む辺境に派遣するとは……」
「すみませんねぇ、ウルガ族を大量に皇都に連行するとなると、途中で革命軍に邪魔をされかねませんから。そのお詫びに、報奨金はローズの十倍にしたでしょう？」
「ふん……今回はよしとするが、二度はないと思えよ」
漫画どおりとはいえ、仮にも自分の上司にこんな口調で話すの、すごい気が引けるな。でも、口調を変えたら怪しまれるだろうからなぁ。
なお、キャンディケインで作った神薬は怪我であればどんな重症も治し、ほとんどの病気を治癒できる万能薬であるが、神薬一つを生成するためには、人間十人分の血が必要だ。
ただ、成分を解析した限りでは、神薬の材料自体に血液が使われているわけではないらしい。
皇国の医療班が成分を調査し、同じものが作れないか試(ため)してみたそうだが、結果的に主成分は、未知の材料と上質な砂糖であるということしかわからなかったそうだ。
そして、この神薬のおかげで皇国の皇帝や大臣、四天王、そしてブラッドリー大臣派の主な貴族たちは、ここ十年、病気一つしていない。
また、神薬は周辺国の王侯貴族との取引材料としても使われている。たとえば隣国の王国とは、この神薬を輸出する代わりに、皇国にかなり有利な形で貿易協定を結んでいる。
戦闘能力がないシキが四大将軍に昇りつめることができたのも、これが理由だ。
神薬はキャンディケインを持つシキにしか作れない。

というか、ブラッドリー大臣がシキを現在の地位につかせた、と言ったほうが正しい。
――さかのぼること十年前。大臣は、馬車の事故で両親を失ったシキの後ろ盾となり、シキの神薬を利用して外国と有利な条件で貿易協定を結ぶことにより外務大臣の地位に昇りつめた。
彼はその五年後、皇帝一家を殺そうと皇城に忍び込んだ暗殺者たちと戦い、神薬の力によって幼い皇帝を救う。なお、その戦いにより、皇帝と皇妃は死亡した。
大臣は幼い皇帝の後見人となり、外務大臣から太政大臣の地位についた。その後は実質的な摂政となり、暗殺者を手引きした疑いのある貴族たちを粛清。
彼らの後釜に、自分の派閥の貴族や、自身の一族の者を据えた。この時に、四大将軍という役職を作って、シキたちに絶大な権力を与えたのも大臣だ。
そう――ここまで言えば、もう明らかだろう。
この大臣こそが、漫画『ひよレジ』のラスボスである。
皇帝は大臣の傀儡に過ぎない。
皇帝は幼くして両親を失い、自身も殺されかけた。その際に、身を挺して自分を守ってくれた大臣に絶大な信頼を置いている。そのため、先ほどの玉座の間でのやりとりのように、皇帝はすべての指示を大臣に仰いでいる状態だ。
……自分で判断が難しい事柄を誰かに相談するのは、悪いことじゃない。
しかし、今の皇帝は大臣の操り人形だ。
自分で考えることなく、大臣に言われるがまま、大臣の方針に反対する貴族を断頭台送りにして

しまう。民の訴えに耳を貸そうともせず、陳情に来た者をいともたやすく不敬罪で闘技場送りにする。
革命軍が立ち上がったのも、無理のない話だ。
「それにしても、シキ将軍……なんだか雰囲気が変わりましたね？」
「うん？」
大臣との話も終わり、そろそろお暇しようかと考えていた時だった。
不意に、大臣にそんなことを言われて、おれはびっくりして目を瞬かせた。
そんなおれを見て、大臣はますます興味深そうな表情になる。
「いつもよりもまとっている空気がやわらかいというか、可愛くなったというか……」
「なんだそれは」
「そう、その目ですよ！」
大臣がいつの間にかおれの目の前にやってきていた。体格に似合わない素早い身のこなしに驚きを隠せない。そういやこの人、最終巻で革命軍と普通に戦ってたもんな～。
戸惑うおれにかまわず、大臣は両手でおれの手をぎゅうぎゅうと握りしめてきた。
「シキ将軍はいつもなら私を蔑むような、絶対零度の視線で見下ろしてくるのに！　なんだか今日は優しいじゃないですか！」
ええ？　い、今さっきのやりとりのどこに優しさを感じたの、この人？
おれ、終始えらそうな口調で喋ってただけなんだけど？

でも、もしかすると……本物のシキとおれの違いを肌で感じ取ったのか？
大臣とシキは十年の付き合いだもんな。長い付き合いゆえに、おれとシキの違いを察知したのかもしれない。今後、大臣と会う時は気をつけないとまずいな。
「もしかして、そろそろ私の誘いに応じてくれる気になりましたか？」
「……誘い？」
誘いってなに？
これから夕飯を一緒に食べないかとか、そういうお誘いってこと？
きょとんと小首を傾げると、大臣が片手をおれの腰に伸ばしてきた。そして、掌でじっくりと腰骨のあたりを撫でまわしてくる。
え、なにしてるのこの人？
おれのお腹が空いてるかどうか、触診で確認してるの？
よくわかんないんだけど、それって触ったら確認できるものなの？
それにしても、どうしよう。こんな展開は漫画にはなかったぞ。
でも、今はまだ大臣との仲は良好に保っておきたいし……食事の誘いくらい乗るべきか？
「わかっ――」
「ゴホン、ゲホッ、ゴホッゴホッ！」
わかったと答えようとしたところで、突然、壁際で待機していたゼノンが大きく咳き込み始めた。そのせいでおれの声はかき消される。

おれは驚いて振り向いた。いまだにゼノンは激しい咳をし続けており、隣にいるヴィクターは心配げな表情で背中をさすっている。
「おい、どうした？」
「すみません、ウルガ族制圧から戻ってきたころから弟は体調を崩していまして……もしかすると病気を移されたのかもしれません」
「感染症か？　それはまずいな」
おれは大臣から離れると、ゼノンのそばに行った。
彼が体調を崩していたなんて全然気づかなかった。でも、見た感じ、熱もなさそうだし、顔色もよさげに見えるけれど……いや、早合点はよくないな。
「大臣。悪いが、先ほどの件はまた今度にしてくれ」
「……わかりました。まあ、いいでしょう」
大臣は白けたような顔で肩をすくめた。
おれはゼノンに歩けそうかと尋ねる。彼は苦しげな顔で頷くと、ヴィクターに肩を貸してもらいながら扉へ向かった。おれも続き、三人そろって応接間をあとにする。
応接間を出てしばらく歩いたところで、急に、ゼノンはヴィクターから離れてしゃっきりとした。なぜか咳もおさまっている。
おや？　と思って首を傾げていると、ヴィクターとゼノンが二人そろって、険しい表情でおれを睨みつけてきた。

「シキ様、なにを考えているんですか！」
「大臣の誘いに頷くなんて、あんたらしくないぜ。どうしちまったんだよ？」
「えっ。ぁ、いや、その……それよりゼノン、お前体調は？」
「あんなの仮病に決まってるだろ！」
え、仮病だったの⁉
いや、健康ならそれに越したことはないけれど……じゃあつまり、双子はおれが大臣の誘いを断って応接間から自然に退出できるように、一芝居打ってくれたってこと？
す、すごい機転だな！　めっちゃできる部下じゃん！
っていうか、あれは応じちゃダメなお誘いだったの？
「シキ様、やはりこの前から少し様子がおかしいですよ。もしかして、ウルガ族に襲われた際の打ちどころが悪かったのでは……」
「あんなのはたいした怪我じゃない。それに、おれにはいざとなれば神薬がある」
ヴィクターの言葉に、ちょっとドキッとしてしまった。やっぱり大臣だけではなく、この双子も言葉にしなかっただけで、おれの変化に気づいていたらしい。
「先ほどの大臣の誘いは、まあ、あれだ。おれが応じてもお前たちがうまい具合に止めるだろうと思っただけだ。あまり無下にし続けても角が立つからな」
「シキ様……」
おれの言葉に、ヴィクターが驚いたように目を見開く。

そういえば、今言ってて気づいたけれど、神薬ってどんな難病も治せる万能薬なんだよな。
なら、今のおれが神薬を飲んだらどうなるんだろう。シキの記憶が取り戻せるのかな？
「それよりゼノン。お前は本当にどこも悪くないんだな？」
「ああ。このとおりピンピンしてるぜ」
力瘤を作ってみせるゼノンに、おれはこくりと頷いた。
「ならばいい。だが、今回の制圧作戦で疲労も溜まっているだろうし、お前たちはしばらく休暇をとるがいい。おれの護衛は不要だ、もしも必要な時はこちらから連絡する」
「えっ？」
「はぁ？　マジで言ってんの？」
二人の反応は芳しくなかった。
てっきり喜んでくれると思ったのだが、なんだか戸惑うような、訝しげな表情だ。
普通、リフレッシュ休暇って貰ったら嬉しいもんじゃないの？
とはいえ、今さら発言を撤回するのも変だしなぁ。
それに二人がそばにいる状況では、国外脱出の方法も調べられない。なので、どのみち二人を遠ざけておく必要がある。
「シキ様、それはどういう……？」
「言葉どおりの意味だ、二度も言わせるな。じゃあ、今この時からおれの護衛はしなくていいぞ。お前たちは部屋に戻れ」

おれは冷たい口調で話を打ち切ると、二人を置いてツカツカと歩き始めた。
……ふむ！　こういう時は、シキの性格は楽だな。
一方的に決めて話を打ち切っても、おかしいと思われないのはいい。
人としてはどうかと思うけどな！
あとは――シキの自室がこの皇城内のどこにあるのか、誰かにそれとなく聞けば完璧だな。
ていうか、失敗した……！　双子に部屋まで送ってもらってから、護衛は不要だって伝えればよかった！
うーむ。こんな調子で、おれの今後の生活は大丈夫なのか？

3

さて――おれがシキに転生して、今日で一週間だ。
意外にも、なんとかうまくやれている。最初は、皇城内の自室の場所すらわからなかったが、不思議と、日が経つごとにそういった知識を思い出していったのだ。
だが、あいにくとすべての記憶を思い出せたわけではない。たとえば、シキの幼少期のことを思い出そうとしても、霞（かすみ）がかかったようにさっぱり思い出せない。逆に、皇国の物価や法律、侯爵としての仕事、文字の書き方、食事の際のテーブルマナーや、皇城内にある施設の場所……そういった事柄は、だんだんと思い出してきた。
なんというか……知識のようなものは思い出せるのだけれど、思い出に関する記憶がまるで引き出せないのだ。やはりこれも転生の影響なのだろうか。
とはいえ、断片的にでもシキの知識が思い出せるようになったのはありがたい。
前回は、廊下の掃除をしていたメイドさんにそれとなく自室まで案内してもらえたからよかったけれど、いつまでもそうするわけにはいかないからな……
なお、この一週間、おれは基本的にずっと皇城内で過ごしていた。街に出てみたい気持ちはあったけれど、ひとまず自室の資料や書籍を読んだり、皇城内にある資料室に行ったりして、皇国の歴

史や地理を必死に調べ、国外脱出の手筈を考えた。
わかったのは、まず、この皇国は霊石山脈と呼ばれる山脈と外洋、そして豊富な資源を持った大国だということだ。
皇国が国として成立したのは、今より八百年前。
元々この地に住んでいた豪族たちは、土地と資源を奪い合い、各々で争い合っていた。また、霊石山脈のふもとにある大湿原には、魔獣と呼ばれる凶暴な生物が生息しており、それらは時に人里を襲った。
そこに、とある一族が海を渡ってこの国に移住してきた。この一族の長が、のちの皇国の初代皇帝になるのだ。
初代皇帝は、この土地に来ると、まずは古代遺跡の発掘をおこなった。この古代遺跡には『神造兵器』と呼ばれる特殊能力を持った武器やアイテムが納められていた。
神造兵器は誰が、どんな目的で作ったのかなどは不明だが、どれも人の手では再現不可能な能力を備えているため、神の造りし兵器――すなわち神造兵器と呼ばれるようになった。
身近なものだと、シキの持つ『キャンディケイン』や、ローズの『パルファン・ドゥ・ローズ』がそうだ。
神造兵器は強大な能力を持つが、誰でも扱えるわけではない。
超常的な能力を誇る反面、『適性者』と呼ばれる人間にしか扱えない。
そして適性者がどこにいるのかはわからない。中には適性者が見つからずに、皇城の宝物庫に死

蔵されているものもある。そのため「我々が神造兵器を選んでいるのではなく、神造兵器自身が使い手を選んでいるのだ」と言う者もいるそうだ。
ちなみに神造兵器という名前ではあるが、キャンディケインのように別に兵器ではないものも多数存在する。
初代皇帝率いる一族たちは、もともとこの神造兵器の発掘を目当てに、この土地へ移住してきたそうだ。発掘というか盗掘というか。
初代皇帝は発掘によって数多くの神造兵器を手に入れた。キャンディケインやパルファン・ドゥ・ローズも、彼が発掘したものであると言われている。
そして、初代皇帝が発掘したものの中でも、特に強力だったのが『天鎧アイリス』、『魔槍ロンギヌス』、『聖剣バルムンク』の三つの神造兵器だ。これらの力によって、初代皇帝率いる一族はこの地域一帯を平定し、皇国の礎を築いた。
「やっぱり、ここらへんは漫画と変わらないんだな……」
おれは書庫から借りてきた本を読みながら、ぽつりと呟いた。
なお、おれが今いるのは皇城内にある自身の執務室だ。シキは侯爵家の領地に屋敷を持っているが、基本的には皇城の一角で暮らしている。
本から顔を上げると、窓越しの空はすっかり闇に覆われていた。
星一つない空は、まるで、おれの未来を暗示しているようだ。
執務机の上には、先ほどメイドさんが淹れてくれた夕食後の紅茶が置かれている。現在、執務室

にはおれ以外誰もいないが、ドアの外には護衛の兵士とメイドが待機している。
おれが机の上のベルを鳴らせば、彼らがいつでもやってきて、どんな些末な用事でも聞いてくれるのだ。
便利は便利なんだけどさ……でもこれって、護衛というより監視だよな!?
そう――この一週間、おれの周囲にはいつも、それとなく兵士やメイドが配置されており、本当の意味で一人きりになれることはなかった。
どうやら彼らは、大臣の命令でおれを監視、兼護衛しているらしい。
まあ、キャンディケインの生み出す神薬は重要だもんな。
神薬があれば病気知らずの人生だし、怪我だってすぐに治る。外国と有利な条件で貿易ができているのも、シキの神薬を餌にしているからだ。大臣がシキに厳重な監視をつけるのも頷ける。
しかし、これでどうやって国外脱出すればいいんだ？
他国に秘密裏に連絡をとって、そっちに移住したいって相談してみる？
でもこの状況で他国に連絡をとるなんて無理だよなぁ。手紙とかも検閲されてそうだし。
うーん……皇国を裏切って革命軍につくとか？
神薬を取引材料にして、他国に亡命したいって革命軍に相談してみるとか？
でも、そっちのほうがよっぽど無理だよなぁ。前回のウルガ族の虐殺には、シキも関わっていた。作戦を主導していたのはローズで、おれはキャンディケインで死体から血を採取しているだけだったけれど……彼らがおれを信用するとは思えない。

それに、考えないといけないことは他にもある。
強大な力を持つ神造兵器には、実は二種類ある。
神造兵器は、シキの持つキャンディケインのように、適性者でなければ扱えないものがほとんどだ。
しかし、まれに、どんな人間でも扱える神造兵器もある。ただし、この種の神造兵器は、一度使ったら壊れてしまうので二度は使えない。
シキはキャンディケイン以外にも『連理のピアス』という神造兵器を持っていた。このピアスは、キャンディケインとともに侯爵家に伝わっていたものだそうだ。
連理のピアスは、見た目は小さな黒曜石のついたピアスに過ぎない。
しかし、主として設定された人間が命令した場合、または主が死んだ場合、このピアスをつけた人間はともに死亡するという誰得？　な能力があるのだ。しかも、一度装着したら二度と外せないし、無理に外そうとすれば死ぬという効力まである。たとえるならば「おれたちずっと一緒だよな！」の最悪バージョンだ。ただ、主が老衰で死亡した場合は発動しないらしいが。
この連理のピアス、実は現在、シキの部下であるヴィクターの右耳と、ゼノンの左耳に装着されている。
主に設定されているのはシキなので、おれが死んだ場合には、二人も死ぬというわけだ。
ちなみに二人が死んでもおれに影響はない。
漫画でヴィクターとゼノンが死んだ時、シキはピンピンしていたからこれは確かだ。なお作中で

は、双子が死んだ時、ピアスも同時に壊れていく描写があった。
「もしもおれが死んだ場合、あの二人が死んじゃうんだよな……じゃあ、皇国から亡命するにしても、まずはこのピアスを解除してからだよなぁ。おれになにかあった時、あの二人が一緒に死んじゃうのは可哀想だし……」
確か、漫画では『解放のティアラ』という、神造兵器の能力を無効化できる神造兵器も登場した。時系列的に、それはまだどこの勢力も手に入れていない。今後おこなわれる、豪華客船での闇オークションに出品されるはずだ。
なお、解放のティアラは連理のピアスと同じく、どんな者でも扱えるが、一度使えば壊れてしまう種類の神造兵器だ。なので、手に入れるなら早いほうがいい。
「でも、あの闇オークションに行ったら革命軍と戦闘になるんだよなぁ……双子に相談してみるか？　でも、いきなりピアスを外したいなんて言ったら怪しまれそうだな……」
執務机に座り、うんうんと頭をひねってみるが、ちっともいい考えは思いつかない。
そうこうしているうちに、扉をノックする音が響いた。メイドさんだろうか？
「入っていいぞ」
顔を上げて居住まいを正し、なるべくキリッとした表情を作る。
しかし、予想に反して部屋に入ってきたのはメイドさんではなかった。シキの護衛騎士であるヴィクターとゼノンの二人だったのである。
「どうかしたか、お前たち？」

二人がこんな時間にシキを訪ねてくるなんて初めてのことだ。
そもそもこの一週間、双子はおれに顔を見せなかったのに。しかも、二人ともとても真剣な表情だ。
雰囲気的にどうやら「暇だし、みんなでボードゲームで遊びませんか？」とか誘いに来てくれたわけじゃなさそうだな。
「シキ様……少し、急ぎで確認したいことがありまして」
口火を切ったのは兄のヴィクターだった。ゼノンは後ろ手で扉を閉めて鍵をかけている。
「確認？」
「あまり大きな声では……おそばに行ってもかまいませんか？」
「あ、ああ。かまわないが」
なんだろう、心臓がすごくドキドキする。
というのも、確か原作だと、二人はシキの部下ではあるけれど、シキと仲がいいわけでもなければ、忠節を尽くすような性格でもなかったからだ。
そもそも連理のピアスを装着させる上司とか最悪じゃない？　おれなら転職一直線だ。
あ、転職されたくないからシキは双子に連理のピアスをつけたのか？　メンヘラ彼女かよ。
そんなことを考えていたら、椅子に座ったままのおれに双子が近づいてきた。
しかし、おれの目の前まで来た瞬間、ヴィクターが思いもよらない行動に出た。
なんと、彼はおれの手首を掴むと、そのまま執務机の上へと引き倒したのだ。一連の動作は素早

く、気がついた時には、おれの手首はひとまとめにされて紐で縛られていた。
え、えっ!?　なにこれ!?　こんな展開、原作になかったよな!?
「な、なにをする、ヴィクター!?」
仰向けになったおれの身体の上にのしかかり、ヴィクターは冷たい声音で告げた。
「大きな声を出しても無駄ですよ、シキ様。部屋の前にいた兵士たちは下がらせましたから」
「なんだと？」
す、すごい用意周到！　じゃあゼノンも共犯か！
おれは暴れてなんとかヴィクターを撥ねのけようとするが、びくともしない。机の上に載せてあった本や書類、インクや羽根ペンが音を立てて床に落ちるのみだ。
すると、こちらに近づいてきたゼノンが床に落ちた一冊の本を拾った。
彼は表紙をしげしげと眺めたあと、おれをひたと見据えた。ひどく冷たい眼差しだった。
「こっちはハンブル王国史で、これは霊石山脈の地図か……どうやら確定みたいだぜ、兄貴」
「残念ながらそのようですね」
「さっきからなんの話をしているんだ、いいからさっさとどけ！」
怒鳴りつけるおれを、双子は冷ややかな笑みを浮かべて見下ろした。
「シキ様だって、もうわかっているでしょう？」
「シキ様、亡命するつもりなんだろ？　まだしらばっくれるつもりか？」
「っ……!?」

あまりの衝撃に、おれは言葉を失い蒼白になった。
え……え!?　な、なんで二人にバレてるんだ!?
「な、なんのことだ？」
とぼけてみたけれど、声が震えているのが自分でもわかる。
そんなおれを見て、ヴィクターは肩をすくめ、ゼノンは鼻で笑った。
「ブラッドリー大臣から忠告をいただきましてね。近頃シキ様は急に国内や周辺国の資料を集め出したようだ、もしかすると亡命を目論んでいるのかもしれない……とね」
「まさかとは思ったけどよ、今の反応を見る限り当たってるらしいな。ただ、亡命を企てるにしちゃ、ずいぶんと大っぴらに動いたもんだな。あんたらしくもないぜ」
「大臣から……」
そ、そうか！　いつもそばにいる監視のメイドや兵士たち……！
おれが書庫で本や資料を集め出したことを、彼らが大臣に報告したのか！
でも、まさかそれだけの情報で、おれが亡命を企てていることを察知するとは……！
それにおれだって一応、書庫から本を持ってくる時は内容がバレないように注意しながら部屋に持ってきてたのに……！
……あ、でも本の抜かれた棚を見れば、おれがどんな本を借りたか一目瞭然か？
でも、まさかそれだけで亡命バレする!?　目敏すぎない!?
くそ、試しに「いやぁ、実は外国に旅行でも行こうかなって思って！　そろそろ有給休暇を消化

しないとな！」とでも言ってとぼけてみるか⁉　さすがに無理か⁉
「ご、誤解があるようだな、二人とも。話せばわかる」
「ハッ、話すことなんかあるかよ？　俺と兄貴をおいて、一人で皇国から逃げ出すつもりのくせに」
ゼノンは苛立ちまじりに吐き捨てると、執務机に腰掛け、腰に佩(は)いていた短剣を抜いた。
シャンデリアの明かりを受けて、銀色の刃がきらりと光を放つ。ぎょっとして身体を硬直させるが、ゼノンはかまわず短剣の刃をおれの頬に押し当てた。
「ちょっと、ゼノン。少し落ち着きなさい」
「でも兄貴。どうせこの様子じゃ、シキ様は正直に言わないぜ。手っ取り早く、身体に聞くのが一番だろう。どうせ神薬で傷は治るんだし」
どうせ神薬で傷は治る、って……ちょ、ちょっと待って⁉
も、もしかして、これから拷問タイムが始まる感じ⁉　仮にもおれはお前らの主(あるじ)だぞ⁉
確かにうちはアットホームな職場ではないけれどさ！
それにしたって、もうちょい手心を加えてくれてもいいんじゃないのか⁉
いや、でもヴィクターは弟に比べてまだ冷静みたいだ！　彼がゼノンを止めてくれれば……！
「……そうですね。シキ様は神薬を持っていますし、少し尋問するくらいはいいでしょう。ここで私たちがやらなかったところで、大臣がやるだけでしょうしね」
ヴィクター、お前もかよ⁉　おいおい、おれってば人望なさすぎじゃない⁉

くそっ、もうとぼけるのは無理だ！　このままだとマジで拷問されかねない！
それなら、いっそ本当のことを言うしかない……！
「……わかった、正直に言おう。確かにおれは、皇国から亡命するつもりだった」
おそるおそる告げるも、ゼノンはいまだに短剣を引こうとしない。
二対のオッドアイが、無言のままじっとおれを見下ろしてくる。
「お前たちは、おれが亡命を企(くわだ)てているか探ってこいと、大臣から命じられたんだな？」
「……ええ、そうです」
「そうか。なら、おれを見逃してくれれば連理のピアスを破壊する方法を教えてやる。お前たちにとっても、おれから解放されるのは喜ばしいことだろう？」
おれの言葉に、双子は驚いたように目を見開いた。
「連理のピアスを破壊って……そんなことが可能なんですか？」
「これ、無理やり外そうとしたら、俺らが死ぬんだろ？」
「神造兵器の一つに解放のティアラというものがある。それは他の神造兵器の特殊能力を無効化する力があるらしい。おれはその解放のティアラがある場所を突き止めた」
おれの言葉に、ゼノンは訝(いぶか)しげな表情になって傍(かたわ)らのヴィクターを見た。
ヴィクターは、難しい表情で沈黙している。
「兄貴、どう思うよ？」
「嘘をついているわけではなさそうですね……ですが、そもそもそこは問題ではありません。あな

たが私たちを置いて皇国から逃げ出そうとしているというのが、納得いかないんですよ」
「だよなぁ。俺もピアスはどうでもいいわ」
あ、あれ!? 目論見が外れたぞ!?
連理のピアスから解放されると知ったら、双子は喜んでこちらに協力すると思ったのに。どうしてか二人は不満げな表情のままだ。
「そもそも、シキ様はどうして皇国から逃げようとしているんですか？」
「そ、それは……」
このままだと革命を起こされて、大臣も皇帝も死刑になって、おれは死刑のほうがマシな目にあわされるんです！　……なんて言っても、絶対に信じてもらえないよなぁ！
くそ、なんて説明すればいいんだ？　おれが転生者で、この先の展開を知っていることを明かしても、この状況では信じてもらえないだろう。か、考えないと……！
ええっと……原作のシキは、プライドが高く冷酷で、貴族主義の男だ。
侯爵家の一人息子で、十一歳の時に両親と死別し、ブラッドリー大臣の後ろ盾を得て侯爵家を継いで皇国四天王になった。シキは現在まで大臣とずっと協力関係にあった。
だから、今おれがここで「大臣の非道なおこないが許せなくなったから、他国への亡命を考えた」なんて言っても、今さらすぎる。二人には嘘だと思われるだろう。
原作のシキが言っても不自然ではなく、それでいて、二人におれの亡命を見逃してもらえるようなことを言わないと……！

「現在の皇帝陛下は……大臣の操り人形だ」
唇を舌で湿らせて、なんとかゆっくりと言葉を紡ぐ。緊迫した空気に、皮膚がぴりぴりする。
「フォートリエ家はずっと皇家に忠誠を捧げてきたが、今の皇帝陛下は……その地位にふさわしい方とは思えない」
「……」
双子は真剣な表情で、おれの言葉に耳を傾けている。
「最初のころは、それも仕方がないと思っていた。先代陛下と皇妃が暗殺によって逝去され、十三歳という年齢で皇位を継がなければならなくなった陛下に、同情していたからだ。陛下も年齢を重ね、大人になれば、きっとご自分のおこないを省みてくださるだろうと考えていた。だが、陛下は……」
苦々しい表情を作り、大袈裟に首を横に振ってみせる。
「陛下はいつまでたっても大臣に頼りきりで、自分で考えようとしない。お諫めする臣下たちを大臣にそそのかされるまま、処刑台送りにする始末だ。国内の餓死者の数は増え続けているというのに、大臣の言うがまま税を上げる……」
今度は苦悶の表情を浮かべて、大きなため息をついてみせた。
「このままでは皇国に未来はない。革命軍も神造兵器使いを集め始めたと聞く。革命が起こる日もそう遠くはないだろう」
「革命……」

立ち読みサンプルはここまで

「ああ、そうだ。だから、取り返しがつかなくなる前に……おれが皇国を去れば、陛下が目を覚ましてくれるかもしれないと考えた。今ならまだ皇国は立ち直れる」
「……だから、シキ様は亡命を企てたのですね」
よし、話しながら適当に考えた内容だけど、うまくまとめられたんじゃないか!?
シキは平民を下に見てるから、平民寄りの意見は言わないようにして、あくまでも国を思う貴族目線で亡命の理由を語ったけれど……うん、思ったよりシキっぽく喋れたし、これはいけたな！
自分の成果に満足し、おれは自信をもって双子を見た。
しかし、双子はなんだかまだ不満そうな顔で、おれを見下ろしている。
あ、あれ？　なんだか、またしても二人の反応が予想と違うんだけれど……？
「へぇ。シキ様がそんな風に考えていたとは知らなかったな」
「まったくですね。それで、シキ様は今後、具体的にどうするつもりなんです？」
「え？」
ぐ、具体的とな？
「それは……亡命して、どこかよその国で名前を変えて暮らそうかと……」
「はぐらかさないでください。シキ様の神薬は皇国の生命線。大臣はシキ様自身にもご執心ですし、追手がかからないわけないでしょう」
はぐらかしてねーよ！
逆に聞きたいんだけど、この状況ではぐらかせる度胸があると思うか!?　両手を縛られた上に、

顔にナイフ突きつけられてんだぞ、こっちは！
っていうか、え？　おれが亡命したら大臣から追手がかかるの？　そうなの？
でも……言われてみれば、あの大臣がおれをそのまま見逃すわけがないか？
「そもそもシキ様の神薬は、外国でもかなり有名だからな。シキ様を手に入れたいと思っている連中は国内外に山ほどいる。連中はシキ様の顔だって把握しているだろうし、名前を変えたところですぐにバレるんじゃねぇのか？」
……そうなの？　おれってそんなに有名なの？
「ええ。ですから、亡命してもシキ様が平穏に暮らすのは難しいでしょうね。平穏どころか……両足を切断され、両目を潰されて、神薬を製造するためだけのモノにされる可能性もあるのでは？」
そ、それって原作準拠ってやつ!?
おいおい、それじゃあ亡命しようがしなかろうが、おれの末路は変わらないってこと!?
国外脱出したところで神薬狙いの人たちに捕まれば神薬製造マシーンにされるし、かといって、このまま皇国で暮らしていてもいずれは革命が起きて神薬製造マシーンにされるし……ちょっと待って、おれの未来終わってない!?
「……っ」
「シキ様、先ほどからなにも言わないのですね。つまり、それも覚悟のうえということですか」
「ふん。亡命した先でどんな目にあおうが、大臣の追手に捕らえられていたぶられようが、最終的に陛下を諌められればいいってことかよ。くだらねぇ」